

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ラスト・キャッスル

2002 (平成14) 年12月1日鑑賞

Data

監督：ロッド・ルーリー

出演：ロバート・レッドフォード／
ジェームズ・ガンデルフィー
ニ／マーク・ラファロ

<ショートコメント>

キャッスルとは城、城壁のこと。①高台に位置し、②壁に囲まれ、③武装した兵士が警護し、そして④象徴としての旗（フラッグ）がひるがえる、この4つの要件を満たすものがキャッスルだ。この映画のタイトルは「ラスト・キャッスル」だが、そのポイントは、通常のキャッスルは人を「入れない」ためだが、この映画におけるキャッスルは人を「出させない」ため、という点にある。つまり、軍刑務所というキャッスルの中の「事件」を描くものだ。

主役は、英雄的な上級将校でありながら、規則違反を犯したことを自ら認め、軍法会議で有罪となり、軍刑務所に送り込まれてきたアーウィン中将（ロバート・レッドフォード）。今年65再になっているはずだが、まだまだかっこいい。

この映画は、いかにもロバート・レッドフォード用に構想し、書き下ろしたかのような作品に仕上がっている。

ロバート・レッドフォードに対峙する軍刑務所の所長、ウィンター大佐にはジェームズ・ガンデルフィーニが配されているが、出演者はロバート・レッドフォード以外はあまり著名な役者ではない。また残念ながら(?) 私好みのキレイな女優サンは誰も出てこない。そして「生まれながらにしてリーダーの気質を備えた者」と「必ずしもリーダーにはなれないがリーダーになりたいと願う者」との対決にテーマが絞られている。

ハイライトは後半に展開される、いわば「刑務所乗っ取り」の反乱。すなわち、アーウィンに統率された元アメリカ合衆国軍人たちの「人間性を取り戻すため」の闘いだ。この「反乱」には、多少現実離れした感があることは否定できない。だから難クセをつけようと思えばいくらでもできる。しかしあまり難しいことは言わず、ロバート・レッドフォードのかっこ良さやアメリカ合衆国軍人の「良き面」に免じて、「楽しい活劇」として一応の合格点を与えておこう。

2002 (平成14) 年12月2日記